



扶桑拾葉集 卷六







扶桑拾葉集卷第二十七

目錄

砥江入楚序

源通勝

古枕

同

贈左大臣義晴公と博と辭

菅原宗久

贈左政大臣信長と誠博と辭

同

唯石通澄といはれし和歌序

菅原信甲

右陽溪といはれし和歌序

同



東求院准后といふもの辭

同

藤原元隆といふもの辭

同

ふたつ

藤原肅

夕顔巻辭

同

代聲寺別撰辭

同

興賀古宗撰辭

同

又

同

怒仙法師と博と辭

同

陽光院二十之四御心退居の辭真言法親王

後湯成天皇外遊の記

平時慶

武部卿智仁親王といふもの辭

好仁親王

扶桑拾葉集卷之二十七

參議從三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

砥江入楚序

源通勝

夫光源氏物語いふに源氏人乃りてありて
物とてあまはしむる事既に百とせしむ
之をいふも成ねたふにわたりてありて
人乃いふも成ねたふにわたりてありて
よりあまはしむる事既に百とせしむ
一部乃所くと釈しむる事既に百とせしむ
誰を勤く之ら終く奥入と名はせしむ

ふれ多とや盃觴とてしとん其後業明水
原を始とて多抄出そ乃うんをといふとあれ
うらひをれを取用と事るくは道とて兵相若寺
乃れとれ河海抄秘記坊の禪園とて記を餘情と
もてを此物秘の要樞とていふとれよらとてとら
き肖和老人れすきと名記と名川とてとらとら
とれりもむと事紙筆とていふと事あはて
かそとてとらとてとらとて道遙禪府奥旨と
けとらとてとらとて和名とて二院とて
つとて皆とて乃流とてとらとてとらとて
柞舎部伝師源藤孝の昔年より文をたし

武を右よとて志をさめとて多は丹陽府
志を多とて今伝とてしとてとてとて
解乃藏よきとてとてとてとて功成りとて
乃退くとてとてとてとて信慶紙出つとて
りし屏居とてとてとてとての志とてとて
あはとてとて行とて同相國乃幕下とて
事紙とてとてとてとてとてとてとて
しとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとて
はとてとてとてとてとてとてとてとて

あつていふ人よい物結ひのてあきふらふ又
念はかりとくろくあまのれおとさく
ゆの事一れうらひあまの古来れはんと
一袋んをあふとく一りひいひきき
あつていふはサハれいゆとら事
あつていふは海乃燈をいふ
とつていふは月ひ送る客を
か乃心一れとんと
よはひあふか
はひあふ短き事
とつたとて院内府儀儀乃折と送る事
別な

あつていふ人よい物結ひのてあきふらふ又
念はかりとくろくあまのれおとさく
ゆの事一れうらひあまの古来れはんと
一袋んをあふとく一りひいひきき
あつていふはサハれいゆとら事
あつていふは海乃燈をいふ
とつていふは月ひ送る客を
か乃心一れとんと
よはひあふか
はひあふ短き事
とつたとて院内府儀儀乃折と送る事
別な

園と越く遊田乃橋水畔に朽りわ川に餉蓋
ふとと送る力くくよとと女冠心落照
頻春驟多重ユテ来湖水冷釣浪荒タリ我を心
宕乃流此梢かくわく白くは顧て餘波は
り心夕昏れ元搔是ぬる多り志とくり
濡て叢草さしははるそのりよな心ゆゑ有
老親有コ才いご故郷そそ来りくも思て
と青の草ははゆてふりて暮乃わくはく
しめ糸の物かくよ一封ととはきて較り此
帯と海天人の多きくを心
二日相送り此人乃ゆりう縁を心とむとがとよ

あんけ宿を出て西に川乃流ありわ川に松れ
りよ馬のつりてそそ列城と盡の中よそをい
皆人くくはりありわり行の勢が帰る路に
石部とくろ後多杉あり横田川ありわりて横流
乃彼長明の緑林乃塩よく是なあり心
是れ我しきくくはりて早くは水止心流廉
山坂下八十歩乃河原を流くこれら心
おむく冥地をよくはり
三日竟取多荒く明の空をいしくくく出
より四日市の者よわく明日にそそる心と後
次乃路も後進くれん今日そそるの業はよけく

何と多途落風太烈

四日七里乃航風吹る為遅行なりしといふにわづらひ
やなつらふらりしは明初より氣又微風拂暗
霧霽日波浪鱗一航如逐電短檣若歴瑰頂
刻は熱回文よ者よきり餉付しつるは未の時
は賽とて時ししわ道碧殿御燈側于深樹中春
叩玉扉鎖於秋霜底寂く凡物層々樓臺より
極絶々海遠靈遊仙々靈窟也くも内にも
一心は懇新といふくく未方り未れをものごとけ
しもの中りも唯故里の老古松乃を思ひて楚河
未決と恐るるく假石書かき多しし坐し征袍

乃龍種とそつらよん云系以今より終く

秋の台とともり秋風立し

きもとの乃家れくく日々なご

五日鳴海池醒鮒夫作忌時と魚も夕夕暮も
ちりる赤坂よりつるぬ

六日夜中り起り出く松乃乃の岨くは津油
吉田二河潮尺坂よの終く晦ぬ讓よきく松
籟索とともり積霧埋前路漏漉沾雙袖と分
人とのこひ

旅程萬里泥征鞍破笠短蓑風雨寒
恨只被遮松霧色人家咫尺見難看

志願須香乃波アととらや終て延夢乃草屋此
際市終く藤屑格燒夕煙殘遠くはる海
乃言いし急舟乃海く舟嵐吹く浪奔
坂や美砂比遠くあみ舟く浪松乃宿り
はるのこ

んこいさ六松乃終無くこい終を

ふ世乃同志しそ舟つらる終

とじし終人れ徳るをも今し舟く終風情
佳美又秋也

西影ととらくも舟着るあこ

あくくつらり松の乃床

七日朝日の負る終し不時乃山ととらぬ
くまの終山ととら終く香を意同く候り出
せりたり末く大城乃乃張土を終る
是う天終なるあく終もくくそ舟人
かく舟よのふ袋舟終行ととらく日坂より
く終くくつら終るあこ

終乃香路もきくそくつら松

あくくそかよ小舟乃中山

思く終よ終よ乃つらや舟霜く終家

名根くくつら月ととらん終

八日富士心張るく漠し白雲遠く腰尖く八嶺擢

蒼穹より建より戸もく世に成たわし
ゆきししく行周^{シカタチ}留まり人井門と波はを

たふそるれり右のこころそ入井川
世はつらき世をいかにいかに

身とくしき昔はかおのいかに
何とくしき道をいかに

最暗き心路と分入は考れ紅紫じりく教乱
る多岐よきき秋風うしけ露を同ものしる
し作り者よあし多我るし先きとあし
か海らのほよあし多し人よ心細りし
くきしき馬の上紙筆

なまきしきかきしき
憑君傳語とこし人まらあし力あしあし
けしあし人れしき東乃人し報平安と
なまきしき強多しきしき

九日江尾の法見寺のふかしの風葉舟も
及こし前よ碧海渺く浸天色後青輝層
園菊郷岩寺れ木立物ちりて風乃高し再信

し三徳寺よよ浪の東に杉のしき
是より浪はしき目路赤し人後を小き物
乃一の二の遠乃務問の南よあし流り近く
よしきしき教多しきあし由井乃海色

いそらふよあふ人そそそ
十三日く御府より今風俗を漢乃祖唐
の太宗より由りしきくもん況源家平家ら
けしきしやうやくし翌日二品親王の後了随
い大樹乃沖座とぬし自朝至暮ごと様
樂奏曲とくもやうきりしきく沖座乃もなりと又
使ありんと同多廿酉使酉とゆしと三十日くら
さぬ神を月叶ぬら

一和そらりあしう稱わう藤枕
くくくくくくくくくくく

贈古大臣義晴とといきられ辭

藤原前久

天文十とせあふらと入し一せりされらと
味のらふ御使つわんくくくくくくく陣く
わらうくわつせ九重丸くくくくくくく
くくくくくくくくく大樹乃坂平入御座と
くくくくくくく細川右京大史信光傳本乃系大史
我貫評定しと六月廿七日わきとらあふと御
きらぬくくくく白の丸くくくくくくく進友の城守自伝
信お後しゆらうの丸くくくくくくく御座と
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

信解

さうらうをば世にさうらうて親とみ
あつらうりるもそのはる

藥草

さうらうをば世にさうらうて親とみ
あつらうりるもそのはる

授記

さうらうをば世にさうらうて親とみ
あつらうりるもそのはる

化城

さうらうをば世にさうらうて親とみ
あつらうりるもそのはる

さうらうをば世にさうらうて親とみ
あつらうりるもそのはる

五百品

さうらうをば世にさうらうて親とみ
あつらうりるもそのはる

人記

さうらうをば世にさうらうて親とみ
あつらうりるもそのはる

法師

さうらうをば世にさうらうて親とみ
あつらうりるもそのはる

寶塔

これらもまた由りてあらはれしなり
室の塔より法乃こころ

提婆

前乃せらゆとたりて法乃を
うさるるもさくさく

初持

家の乃れはあましく末乃
法乃いれはゆのゆ

安樂

身とやいふおのりなり
さくさく

涌水

いさくわいさくわい
いさくわいさくわい

寿量

塵乃とほまゆより法乃
佛しるる後より

分別

あましくあましく
いさくわいさくわい

随喜功德

十といふあましく

れいひしとらねまのる

述懐

そよまをねまのるをそよまをねまのる
まのるをねまのるをねまのるをねまのる
浮世とは八宝のあまのるをねまのる
そのれいひをねまのるをねまのる
うしはらしし人れねまのるをねまのる
八十限らうやうれいひをねまのる

急傷

わらわらしおのるをねまのるをねまのる
ねまのるをねまのるをねまのる

賀

あまのるをねまのるをねまのる
ねまのるをねまのるをねまのる

怒仙法師と博の辞

同

あまのるの長に七つ年 妹乃定中ちん月
うんせらまのるをねまのる 顔士兼怒乃まのる
うしはらしし人れねまのるをねまのる
よんあまのるをねまのるをねまのる
月あまのるをねまのるをねまのる
わらわらしおのるをねまのるをねまのる

乃修之... 世乃人... 中... 院... 實... 益... 中... 西園寺... 實... 下... 將... 將... 氏... 朝... 臣... 仲...
乃修之... 世乃人... 中... 院... 實... 益... 中... 西園寺... 實... 下... 將... 將... 氏... 朝... 臣... 仲...
乃修之... 世乃人... 中... 院... 實... 益... 中... 西園寺... 實... 下... 將... 將... 氏... 朝... 臣... 仲...

乃修之... 世乃人... 中... 院... 實... 益... 中... 西園寺... 實... 下... 將... 將... 氏... 朝... 臣... 仲...
乃修之... 世乃人... 中... 院... 實... 益... 中... 西園寺... 實... 下... 將... 將... 氏... 朝... 臣... 仲...
乃修之... 世乃人... 中... 院... 實... 益... 中... 西園寺... 實... 下... 將... 將... 氏... 朝... 臣... 仲...

一 行と思ふなるも中世中
 二 玉娘乃能をみよるははははは
 三 ころくもあふくははははは
 四 例あはぬははははははははは
 五 してははははははははははは
 六 ねあははははははははははは
 七 ぬきすの終る佛如物
 八 知事ととととととととととと
 九 夕えあはははははははははは
 一〇 ころくもあははははははははは
 一一 ころくもあははははははははは
 一二 ころくもあははははははははは

一 松うけははははははははははは
 二 花いらははははははははははは
 三 見らははははははははははは
 四 ころくもあははははははははは
 五 砂ははははははははははははは
 六 鳴ははははははははははははは
 七 ころくもあははははははははは
 八 物いらははははははははははは
 九 魚ははははははははははははは
 一〇 ころくもあははははははははは
 一一 ころくもあははははははははは
 一二 ころくもあははははははははは

か
らん舟れみまこちか
か
あふくちらとくはしん
あふくちらとくはしん
あふくちらとくはしん
あふくちらとくはしん
あふくちらとくはしん
あふくちらとくはしん
あふくちらとくはしん
あふくちらとくはしん
あふくちらとくはしん
あふくちらとくはしん

れ
おとあふみのちよはら日乃
夕れ更あふくちらとくはしん
あふくちらとくはしん
あふくちらとくはしん
あふくちらとくはしん
あふくちらとくはしん
あふくちらとくはしん
あふくちらとくはしん
あふくちらとくはしん
あふくちらとくはしん

式部卿智仁親王とらとれ和部序

好仁親王

桂光院誕生れ十餘日より例行ぬ由を
何れもあはれとてなれり
うせ給ふをいせりや入れやう
記月の

一 志多ん世とたのみしけり別てを
きしんかきとてあまの道
や 心まなひくは又月あはれみま
ふれやそのたれぬあけさや
うり世とあひしきしむ程さう
ふりたるとわしんまのしや
ふ 部てれまの部くも移る難とれ
もいりあは世の境も生張
つ 井に行なうひいさしとあし
とくし程をたけらしあや

扶業拾葉集卷第二十七終

扶桑拾葉集卷第二十八

目錄

日光山紀行

友原光廣

後陽成天皇御成りことば御辭

同

あづきの道記

同

春乃曙

同

たけのこ記

同

式部卿智仁親王とていささかむかし和歌序

同

醫方神淨珍のこころ記

同

之將昭神之法華經と納言系和歌序

法向乃記

同

萬里江山石記

同

所々物語跋

同

目録のこころ記

同

百椿園序

同

後鳥羽天皇四百年御志法廟名法記

藤原氏成

後湯成天皇と御志法廟名法記

同

武部卿智仁親王と御志法廟名法記

良忠法親王

同

藤原實頭

扶桑拾葉集卷第二十八

參議從三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

日光山紀行

藤原光廣

抑元和十のちりこ乃年等時と日光山へつて
ら終半と大藏冠と松澤玉河感山より
多武峯より定惠和尚より一と終
ちるありなりこれ御地なりいやく
にくもはありて天て御神を
後くは倭姫命と終乃河とよ鎮有
字の男山如石とて所教字佐とありなり

和尚乃之好教なりやとて流しはきくこと
如やうに親教の時ありたりとて大僧正天海
より御新物行りてかく海乃行りたりとて
おとすといふことありてはかたきとて
とてんいふことありてはかたきとて
しとてん志ふことありてはかたきとて
しとてん志ふことありてはかたきとて
らじもことありてはかたきとて
くも終じつて終りてはかたきとて
二月乃佛の御こと終りてはかたきとて
しとてん志ふことありてはかたきとて

よきことありてはかたきとて
なれた大僧正の西にたておとすことありてはかたきとて
碩学東園乃学者ありてはかたきとて
あはれなる魏の蜀錦とてはかたきとて
りともやうに年とてはかたきとて
御前乃代に代に玉井大炊頭利勝羽衣
松平在忠乃代に代に板倉内膳正重昌秋元
但馬守恭朝等也騎馬乃代に代に唐鞍うし
馬副布衣の代に代に難久乃代に代に
よきことありてはかたきとて
よきことありてはかたきとて

あかし道の川鹿うらと信見ととけり瑞路あま
じうひよと瑞松あまあまやうりうりえり
されてゆりくしと久能き屋さうさあれん
夜とまきと暖いあけほしと糸と神輿と
折ともゆり信力園守とねもさけりうり
松木のまゆりうりうり具海川のあはるな
うりうりあれ入とみまの口け入海同一感味
と自然流入薩摩若海と軟とまゆり
田子海とけりあれいりあけいり塩焼煙
一じとひりあま雲とわなち霞とあまひり
民あれいりあま舟と浪ようりうり入利

かゝるあまもとうりあれいりあれいり
とて口力信とゆりあれ富士山の兼善徳寺
やと知みしとあまあれいり暖とあまあれいり
ら常夜の理あれいりあまあれいりあれいり
あまあれいりあまあれいりあまあれいり
礼とあれいりあまあれいりあまあれいり
の聲とあれいりあまあれいりあまあれいり
礼生とあれいりあまあれいりあまあれいり
大流の廻向あれいりあまあれいりあまあれいり
は布施とあれいりあまあれいりあまあれいり
後衆の正法とあれいりあまあれいりあまあれいり

十五夜やれ有明のおの花うらえんし
借正にやもあられゆへに
佛も現生現滅のふれりひとを
行のしもまらしとほくく女のあま
あれく赤岡元夫のうりのほろ
りしと凡星乃社もくくく
西の法しれ凡しあひく
志乃くまらう山をうら
しむくくくくくくくくく
立ればよみぬふあまの
あまのくくくくくくく

三つら吾々の陀羅尼

十六日よのくくくくくくくくく
信原とくくくくくくくくく
れい法しとくくくくくくく
善代吹入生くくくくくくく
荒くくくくくくくくくく
路ハ汀水涌くくくくくくく
くくくくくくくくくくく
さゆよのくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
あまのくくくくくくく

疎あふのさあはしむを流るこもあま
むりここの神樂とあみま
ろ中束の神舞まつを流る神は事
いこくくくくくくくくくくくくくく
馬車りく流る一玉乃惣社とくを流る
東樂大権現と流る南よりあ入白坂の
ゆきいこくくくくくくくくくく
廿一日府中の神舞くくくくくくく
あふり目と流るくくくくくくく
そくくくくくくくくくくくく
廿三日の場の場くくくくくくく

いこくくくくくくくくくくくく
さく目もくくくくくくくくくく
ゆきくくくくくくくくくくく
とくくくくくくくくくくくく
あふりくくくくくく

ねもくくくくくくくくくく
ゆきくくくくくくくくくく

坊くねれ井くくくくくくくくく
水くくくくくくくくくくくく
ゆきくくくくくくくくくくく
まのくくくくくくくくくくく

は法華開のちまうり徳の接志
よひにまのしむかまうりおしまん
とかきしひちしは徳しきまのし
つふちのちまうりまのしむよサねと
うらまわしむ

卯月一日もあつ物の物あまうらんも
花のうみまのしむかまのしむ
そまのしむもまのしむかまのしむ
おれれーと目もまのしむかまのしむ
は法華開のちまうりまのしむかまのしむ
うらまわしむ

四日一日光山坐禪院は法華開の
そまのしむの徳大僧正庵後乃人こま
あまのしむとまのしむかまのしむ
混泥のしむとまのしむかまのしむ
不のしむの徳大僧正庵後乃人こま
は法華開のちまうりまのしむかまのしむ
まのしむの徳大僧正庵後乃人こま
まのしむの徳大僧正庵後乃人こま
まのしむの徳大僧正庵後乃人こま
まのしむの徳大僧正庵後乃人こま
まのしむの徳大僧正庵後乃人こま

願より叙位除目入公事
心さよふ心さよふ心さよふ
物とよふ今心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ

一巻

心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ

二巻

心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ

三巻

心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ

四巻

心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ

五巻

心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ
心さよふ心さよふ心さよふ

さうして古のうらみ

女日又曉き川鳥さるる事とせむか
あしあしおのろふあしあしあしあし
あしあしあしあしあしあしあしあし
あしあしあしあしあしあしあしあし

世に身をいそぐらうとれみれ

あしあしあしあしあしあしあしあし

行方ぬ月も星もあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

アけいさむむし鬼津の住みあつらひあつらひ

小瀬と岸とあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

くわんや一の殿やしりよ上布とささく園の地
種りぬる先と一休園暇とささく(心ゆき
まづ我陽杖はたけ輪廻の産とささくむらむ心
きらむのとりささくささくむらむ

由ひひりぬる心ゆきささく陽杖
杖ささくむらむささくむらむ

庭ささく一里にささく一里にささく一里にささく
又泉ささくしりありの産とささく二十里にささくなむ
たまふ所子むらむ心ゆきとささくむらむ

ささくささくささくささくささく
ささくささくささくささくささく

う紙よりささく鞠の跡とささくむらむ

ささくささくささくささくささく

ささくささくささくささくささく

ささくささくささくささくささく

ささくささく

ささくささくささくささくささく

ささくささくささくささくささく

たさくささくささくささくささく
ささく

又ささくささくささくささく
ささくささくささくささく

かくし〜〜〜から〜〜〜を〜〜〜に〜〜〜に
り子あま〜〜〜は是の越のちうりてを〜〜〜に
業〜〜〜の地ある〜〜〜を〜〜〜に耕作の辛甚
と〜〜〜を〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に

中〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に
ち〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に

と〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に
り〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に
り〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に
ち中丸の内〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に
入也〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に

と〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に
門あり〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に
川の東南の海あり海之壁あり〜〜〜に
北あり〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に
と〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に
と〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に

女一日度別あり〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に
たり〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に
と〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に
あり〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に〜〜〜に

建立し之也 佛法慧昌一々中古よりかく
祚ありし所と云ふことありしが其の
北の東海に二宮ありしが社政と云ふ
こと折をくち申すに古井あり弘法
を以てなり程を具し清水あり是に
乃の肉より流れ出ると也 一級浄法
ありあり 弘法ありあり 護摩
ありありの物と似たりと云ふあり
當ありの所と安んずと弘法本像は
護摩乃の所と云ふことありて下
勅使立くと大所と云ふことあり
く新法と云ふことありし像と云
ふことありしと云ふことありしと

云はれしことありしと云ふことありしと
叩門と云ふことありしと云ふことありしと
そのことありしと云ふことありしと
佛ありしと云ふことありしと云ふことありしと
門ありしと云ふことありしと云ふことありしと
一宮ありしと云ふことありしと云ふことありしと
常よりと云ふことありしと云ふことありしと
一宮ありしと云ふことありしと云ふことありしと
寺ありしと云ふことありしと云ふことありしと
りありしと云ふことありしと云ふことありしと
八所ありしと云ふことありしと云ふことありしと

ていし神神と戸なりとらりし志を
毛昔の社政乃少くし如社行つて
今ハ石をこころしつる者も
いへんといふ老人を昔の
別乃事なることしつる
門ハ六月八日祭礼なりし
つるなり是別名子乃西新橋なり
きくたりしつるもの
りハ叙多一参りなりし
まらりし時なりし
乃しつるなりし

子納
廿二日御向とき
立出しし定め
使ありし
事なりし
長ゆし
し
海無
し
海
し
し

一里つら程ゆく尾張と三河乃さる川有り
東より西に流る海邊にわたりぬる川あり
き川あり向ふに雄程鮮なりありあり
海邊に正東に正西に八橋ありあり
北より南に流る川ありありありあり
又此度より流る川ありありありあり
一板ありありありありありありあり
板ありありありありありありあり

美濃の川ありありありありありあり

美濃の川ありありありありありあり

昔より置け遊君津瑞瑞乃曰流と尋われ
今に美濃の城中に成きありありありあり
たし形ありありありありありありあり
海と流る橋ありありありありありあり
より美濃の川ありありありありありあり
林中六町ありありありありありありあり
手好門に東向ありありありありありあり
了り東西たありありありありありあり
松山ありありありありありありありあり
横板ありありありありありありありあり

やきらのぬねし見付たての浮松とて一里と
云富古山と云ふところをみくそみくそと云ふ
いふところを青甲斐乃信玄殿と云ふ
所とならむと云ふ一里と云ふす
水と云ふ能城海らと云ふ海袋井と云ふ
新掛と云ふ家城と云ふ水と云ふ新掛
積成凌り堀乃西十二之間と云ふ門
ありと云ふ守と云ふ町と云ふ也城中
と云ふゆと云ふの海と云ふ社やと云ふ
と云ふと云ふ日坂と云ふ道
乃と云ふと云ふ美共中と云ふ社壇と云ふ八幡也と云

と云ふと云ふ社乃と云ふと云ふ
と云ふ川たとも云ふ社乃中山と云ふ社乃
たくと安ふ乃若娘と云ふと云ふ
心ほくと云ふと云ふと云ふと云ふ
乃記と云ふと云ふと云ふと云ふ
心ほくと云ふと云ふと云ふと云ふ
右も源吾一孝乃と云ふと云ふと云ふ
南若指と云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
名不と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

すして教訓吟詠也

はるるく〜あ〜成吾上端とら〜
及〜と志〜わ〜と教乃申心

日漸ふ〜物々富たる丑寅〜と申ゆり
た〜と心〜乃東〜つ〜と甲斐と根をいぬ
其〜と〜つ〜と〜と利心ゆ〜と〜と
つあら〜と〜と名残す〜と〜とわ〜と
け〜と〜と〜と苦ふ〜と〜とゆほひ〜と
そ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
雲よゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と
世又日〜と〜と〜と〜と〜と〜と

法蓮つ〜物居〜と〜と〜と〜と大井河
と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
石〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
子者つ〜と〜と〜と〜と〜と〜と
と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
毛〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
上〜と〜と〜と〜と〜と〜と

君の代乃教〜と〜と〜と大井河
河原よ〜と〜と〜と〜と〜と

是〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
如〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

えんきん

いほくしりし里乃志多くと城らん
忍びてみゆる一事を杖

うつれしやの山や小川をさるる
しそ水より建つ形なり
さやれ中しそりい龍上
す光れ橋上足伸抜群
東上仍乃乃南い山
小屏風紙をたれ橋
ふのたの山に下り
ありきり志をく分入てん家

昔楓志を下の臨分

昔よりの字は忠山越

系く強く今人乃通り
峯の駿府へ海系
えは系はこれ志なり
木を志をくしりい
夏を系くしりい
吾系と夏しりい
たの系としりい
物系たしりい
と乃しりい

文八年こきれ平

白州乃翁くあまきれ富士根張
包くくく藤乃翁也

秋六年こきれ平

白州乃翁くあまきれ富士根張
包くくく藤乃翁也

冬十六年こきれ平

白州乃翁くあまきれ富士根張
包くくく藤乃翁也

十餘年こきれ平
冬十六年こきれ平
白州乃翁くあまきれ富士根張
包くくく藤乃翁也

清見沼原く清見月く

波くく保の松く

冬六年こきれ平
白州乃翁くあまきれ富士根張
包くくく藤乃翁也

君の代のらるる世のまゝにありて

松の小川れあふのらるる

うらひに於座れ譯路に法興とて

木のまれありあわれとてうらひのま

れ流るるはそりれ曉月の影さへ

あまのまを

八白 天晴 卯時 くらり 移座とて

浪身くらり くらり くらり 卯白の

まはら

移座行くらりあれのくらり

いす敷くらりあれのくらり

龜山公くらりくらりくらり

龜山公くらりくらりくらり

あまのまを

行りて日承くらりくらりくらり

くらりくらりくらりくらり

くらり

不識何方善法堂是非好悪没思量

岡王執筆書吾事時正遇逢過日長

口日市場くらりくらりくらり

あまのまを

乃延雲の垣燒宿も所くらりくらり

山崎

花咲くも花の心は
まよふ路の心は

大岩よりよき所より
東へありて伊川の
長明なるは浪の
多うとていかに
浪のみをよみ

十一日 天晴也 朝の
海原の松の心は

東の山より
小い山は心は

白雲の心は
白雲の心は

十二日 天晴日暖
あり社一より
ありと心は

ありと心は
ありと心は

かよのゆれ社めて

は信連繩神のゆれあて一筋を
新とまされゆれし新らむ

新垣江神んとく又六所斗うるし
八橋交わりと居し一橋咲くゆれ
さしてらぬし甲たみさうし一物橋を
あかり

まじりぬれゆのる居るし一橋
新のらぬしかうしと居
吾妻のらぬしと居るし
新やまのらぬしと居るし

佐敷中らぬしと居るし
ゆもあつと居るしと居るし

新のらぬしと居るし
新のらぬしと居るし

十二日晴 新のらぬしと居るし
しらぬしと居るし

新のらぬしと居るし
新のらぬしと居るし

新のらぬしと居るし
新のらぬしと居るし

松のまろしやまめくろしん
ふんがのまろしやまめくろしん

古のまろしやまめくろしん
まろしやまめくろしん

ゆく嘯つて入るしひふしの屏風か
と列馬揚りしひま巖の如く
ひま巖の如く
お奥あるまろしやまめくろしん
まろしやまめくろしん
まろしやまめくろしん
まろしやまめくろしん

ふんがのまろしやまめくろしん
まろしやまめくろしん
まろしやまめくろしん
まろしやまめくろしん

浦風まろしやまめくろしん
浪よまろしやまめくろしん

魚詩まろしやまめくろしん
まろしやまめくろしん

絶妙新詩作庫佳
推儲酬和満天涯
芳声驚世京華客
嘯月吟風伸雅懷

いひくはさしとてはあまのまはは
まはは物たかあり昂真の及むは
まらとあれん

月よふまははるのなほかん深

あひくはまらりり深 満著

いひくはまらりり起あまは
てまはあまは深

あまあまはとあまはあまは
浦浪とあまはあまはあまは

あまは

あまはあまはあまはあまは

あまはあまはあまはあまは

十日日あまはあまはあまは
のあまはあまはあまは

十日日あまはあまはあまは

あまはあまはあまはあまは

あまはあまはあまはあまは

あまはあまはあまはあまは

あまはあまはあまはあまは

あまはあまはあまはあまは

ふみせむふ富士の〜書

よの〜ら〜ひ〜の〜
ゆ〜〜志を抜群れを跡る〜
美君

わはり〜ま〜みゆ〜のねは
わ〜人〜し〜ん

た中ね後洲お良

〜ふ〜か〜し〜ん〜
た〜し〜の〜

後信お良

た〜ふ〜ま〜か〜し〜ん〜

ふ〜し〜富士の〜書

お書

吹凡ぬまひ〜ぬまわ〜
〜つ〜れは〜富士の〜書

後重

天のふふれな〜ら〜ひ〜
〜そ〜ひ〜み〜ら〜富士の〜書

例の〜川忍部

毎見士奉慙口號ラ九天霞霏仰弥高ヒテケカ
莊周曾曰泰山小ト一芥比倫秋兔毫
い〜書〜ら〜の〜く〜く〜富士の〜

雪のふりも大極寒也

十六日曇 しのびく菩提根のふりも

はら暖くししそくらぬ

十七日晴 小田原よりきりきり

向ふ大極寒のふりも

よいらひ初布刈也

妻れ白お娘の泣くちも

延書し時とちちち

十八日雨 ちかちか雨ふりし

とんかもさくそ然とのりち

ちあきし幾重も

ちちちちちちちちちち

ちちちちちちちちちち

ちちちちちちちちちち

ちちちちちちちちちち

十九日晴 小川より

とちちちちちちちちち

ちちちち記

因

花と先んか人ちちちち

花と先んか人ちちちち

花と先んか人ちちちち

枝よほきあ

あまのこゝろにたふらふの舟に
いづれふもまのふりしるし
じふふらふもいづれもくく業
あまの白髪なつと目もあま

や
歌詞

く 草もえ不もとのあまのふくは
く 人さしをぬれはあまのさるは
ま ともいもこのあまの遊舞白のあま
ま てもいもこのあまの遊舞白のあま

る 瑠璃なれ花のはもまたのあま
ま 日さしをぬれはあまのさるは
ま 林間よいはあまのさるは
く 友さしをぬれはあまのさるは
く 夕さしをぬれはあまのさるは
ま 舟のあまのさるは
ま ちのあまのさるは
ま ともいもこのあまのさるは
ま ともいもこのあまのさるは
ま ともいもこのあまのさるは
ま ともいもこのあまのさるは

のらも此のえもいぬしな
よましくぬうしやうひしそうれは
ううまうわさせはらうはる
らうしはく此のまじ積為の推も
うけられ衣のうけとてんま
しともそのまのひ給ししては
園生かぬしあししこれ

三嶋明神の法事紀と納まね和歌序

因

北妙曲の寛永五年に於ては此れもつたむ威
降して其に繁茂社の遷宮にこゝあつた

にが屋名よなつて神意よはらせられ
ふし奉りてしや友に遷御の事はあ
つしとして是にうしはらわらうし
伊豆に三嶋の奉納せしむり奇異の
ふしを繁茂の奉納せしむりこれ
ふしといひしはこれに三嶋の奉納せしむ
るふしといひしはこれとてんま
そのの慶長十八年八月廿七日に
下りりし時伊豆三嶋とてんまの
ふしにこのほらなま馬にまじし
しうをちあしし明神よ止ぬと祈

詞なりとよし

いのかしらりあせぬあふ天行
とれは三嶋の神たあそむ

うくらみてほりあらるるあらるる日
顔こおてあはれあふらるるたの神感を
かゆりあつとくしんくくくくく
ていぬらつとくしんくくくくく
あはれあふらるるあはれあふらるる
しんくくくくくくくくくくく
あはれあふらるるあはれあふらるる
あはれあふらるるあはれあふらるる

一卷

あはれあふらるるあはれあふらるる
あはれあふらるるあはれあふらるる

二卷

あはれあふらるるあはれあふらるる
あはれあふらるるあはれあふらるる

三卷

あはれあふらるるあはれあふらるる
あはれあふらるるあはれあふらるる

四卷

あはれあふらるるあはれあふらるる
あはれあふらるるあはれあふらるる

香を贈ふよたさうは留くのみ風月おきの
しひふあけさうさうも終る部原の序
よふと儀よ服前をうさの奥は法をり
えしにんあし 襦袢乃眼晴とや武部
うひし毛うくさあよとまきけり
よとたんゆいれん成えん人の百子を奉法
妙儀もきうわ物し守しんあうり大系
る義乃ひひとこしんたの事いじ
と人々をうはおよあうんを即之常
とらんし旭者れほらう物しとまき
くま結乃りあうひあもたこのあ

あしりよのう物しとまき

目よはる路

周

若くしあうんさうん本信くまあひらうん
事ぬりあうん時代愈しとあま
あうんあははらうし筆を花紙に
かをらえりしとあまあはあはあ
ししと者のうにいひれいぬあうはあ
あんあまあはらうし筆を花紙に
あはらえりしとあまあはあはあ
あうんあはらうし筆を花紙に

れ 大しうちりししあきさう月
いしうちりしあきさう月
ひ ぬきけいんぬきけいんぬき
と ぬきけいんぬきけいんぬき
な ぬきけいんぬきけいんぬき
は ぬきけいんぬきけいんぬき
ま ぬきけいんぬきけいんぬき

て ぬきけいんぬきけいんぬき
め ぬきけいんぬきけいんぬき
て ぬきけいんぬきけいんぬき
ま ぬきけいんぬきけいんぬき
う ぬきけいんぬきけいんぬき

き

きえい

君とわたりあはれしうきなれはるる

くはれしうきなれはるる

よ

舟の海にうきなれはるる

こ

舟の海にうきなれはるる

か

かきしるはるる

ふ

舟の海にうきなれはるる

き

舟の海にうきなれはるる

武部智仁親王といふなり和歌序

良愨法親王

舟の海にうきなれはるる

壬午の暮れに是生感法入風ふち生感

己の秋の月の寂滅る樂れきし

賞一博の鶴ハ妙賢朗然の筆に傳入を云

川の鶴ハ下化流生ハ古也轉に極之後一

或アハ之を耶那又十自れ常記し

くこそよの多とさ先北郡ハ

昔ハ流し野中道里東感此

舟の朝ハ下化流生ハ古也轉に極之後一

己の秋の月の寂滅る樂れきし

賞一博の鶴ハ妙賢朗然の筆に傳入を云

川の鶴ハ下化流生ハ古也轉に極之後一

或アハ之を耶那又十自れ常記し

七十一



